
魔法少女リリカルくら

MでSでTな人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルさくら

【Nコード】

N0684R

【作者名】

MでSでTな人

【あらすじ】

・これから始まるのはifの物語・・・
ある日の夜とある家族の家に見たこともない箱が置かれていた、その中には子どもが、夫婦はその子を引き取ることを決めるが・・・

諸注意（前書き）

・注意・これは前書きであつて前書きではない・・・
気分悪くなつたらすぐに（戻る）を連打することをお勧めします

諸注意

！注意！自分はド素人です、読む人によっては気分を悪くする可能性があるので御了承ください。

この小説は以下の項目が小説内に含まれます

- ・原作ブレイク（歴史改変）
 - ・チート？（準チート？）
 - ・時間逆行（一部世界のみ主になのは）
 - ・並行世界移動（簡単に言うと原作世界移動）
- そういったジャンルが苦手な方は読むことをお勧めしません。
最後に、自分は学生の身なので小説の更新、感想の返事^{あったら}などが大変遅くなります。

諸注意（後書き）

次は設定です・・・別に読まなくても話は分かりそうな気がする・・・。

主人公設定とステータス（前書き）

設定の方式はさくらに何か起きる度に更新するよ！

主人公設定とステータス

魔法少女リリカルなのは（無印時）

高町さくら（7歳）

ステータス

魔力C・

筋力F・

知力D・

敏捷C・

幸運C・

耐久D・（転んだら膝が擦り剥ける、一般人程度）

対魔力B

スキル

未取得

主人公説明

身長・小学生一年女子の平均値・・・（ヴィータより少し高いぐら

い)。

髪の色・黒と紫が8：2程度、黒色にかなり近い紫色、目の色は青、顔立ちは整っている。

外見・若干つり目なようj・・・女の子。

イメージ？な人は、つり目で髪の毛が肩まである黒髪の女の子を思い浮かべてください。

魔力光・？

性格、のんびり屋・たまに冷静、暴走

甘党・なつくと犬・人見知り・何かと勘違いしやすい・犬好き（毛がモフモフした犬種）・白衣が苦手。

主人公設定とステータス（後書き）

作者が更新できるときに更新するよ。

ブログ ハジマリ (前書き)

やっと始ったのかな？結構時間かかったけどこれからよろしく願
いします。

ブローグ ハジマリ

side 士郎

少し遅くなった、一人寒い夜の道を歩いて一人そう考える、頭に浮かぶことは家族のこと。

なのははまだ二歳になったばかりで甘えたがり、美由紀はまだ未熟なところもあるが足捌きがだんだん上手くなってきた、恭也も最近、目を見張るほど強くなってきた、そして桃子、自分には勿体ないほど良くできた妻だ。

「よし！早く帰ろう」

つい声に出る、頬も少し緩んでいるのがわかる、家族が待っている、それだけで早足になる。

この角を曲がったら五秒もかからずに家につく。

「3」「2」「いち???なんだこれは？」

家の前に何かある、形を見るに箱、しかしなぜ家の前に箱？郵便？いや、郵便なら誰かが受け取るはずなんだが。

・・・しょうがない、家の前になにかわからない物を放っておくにはいけないし中を確認するしかあるまい。

「金属の箱か？にしては軽い、中身はどうなってる！？」

「士郎さん？、玄関の前でなにしているの？」

「ああ、桃子か、ただいま」

いつの間に目の前にいた妻に驚きながらも返事を返す。

「おかえりなさい、それでなにしてるんですか？」

桃子が聞き返してくる。

「ああ、そうだこれかなんだか知らないか？」

何故かさつきより重くなっている様に感じる箱を見せる。

「箱？この箱がどうしたんですか？」

「知らなかったのかい？、僕も今帰ってきて見つけたんだが、家の前にあったんだ」

「この箱が、ですか？」

「ああ、このまま放っておくのもいけないと思ってたら」

そついいながら桃子のほうを見ると。

「私がいた」

と言い返したそして。

「じゃあまだ中身を見ていないんですか？」

彼女は確認してきて子供のような笑顔でこう言った。

「じゃあ開けてみませんか？」

その顔は反則だ、その瞬間、箱を開けるといふ選択肢が崩れさった音がした。

「しょうがない、開けるか・・・」

桃子に急かされながら箱を開けてみると。

「「赤ちゃん？」」

なぜ赤ちゃんが箱の中に？そう思っていたら彼女は悲しそうな顔をしていった。

「捨てられちゃったのかな・・・この子」

「・・・多分そうだろう、この子を警察に保g」

保護してもらおう、そう続けようとしたら彼女は驚くことを言った

「土郎さん、この子うちで引き取りませんか？」

引き取る？最初はその言葉を理解することができなかった。

「えっ？」

ブログ ハジマリ（後書き）

ブログはとりあえずここで終了、途中に見えるかもしれませんがこれは仕様です、これは仕様です、大事なことで二回言いました。

今回、千文字が以外と多いことを知った作者でした。

次の更新は五日から一週間後？です？なのは（主人公に非ず）更新できるかもしれないから・・・暇なときに。

さて次の回はだいぶキンクリします大体七年程、時期は無印の3話辺りかな、しかもなにげに急展開だから読むときは計画的に

第一話 ニチジョウ？

（前書き）

やっと、やっとだよ、この第一話を投稿するまでに何回エラーが起きたか・・・。

ドラマだよ、ああそうだ、まるでwwまあ短い文章をちまちま投稿する形になると思う。

はい、それでは？魔法少女リリカルなn・・・さくらさん？始まります。

第一話 ニチジョウ？

side 桜

pipipipi, pipipipi, pipipipi, pipipipi,
pipipipi

今日も主を起こすため時計は鳴り始める。

しばらくすると、ベッドで寝ていた女の子・さくらが体を起こした。

「んっ・・・もうあさなの？ふっいいや、あの時計は壊れているんだ、きつと・・・おやすみなさい」

きつとアホのk・・・寝ぼけているのだろう、そしてさくらが意味のわからない事を理由に寝ようとする。

pipipipi, pipipipi, pipipipi, pipipipi,
pipipipi

まるでその行動を見透かしていたかのように時計がさくらに警告す

るように鳴り始める。

しかし少女はベッドから体を起こし時計に。

？バキヤ？

無情にも手刀を叩き込んだ。

すると嫌な音を出し時計は沈黙してしまう、少女はそれを見てこれでいいとばかりに頷き、体を倒す。

哀れ時計の奮闘むなく二度寝に入り始めるそう思われたとき、勢いよくドアが開き栗色の髪をした女の

子・なのはが焦った様子で入ってきた、そしてさくらのふとんを剥ぎ取りながら言った。

「さくら！、もう八時だよ早く起きてごはん食べないと学校に遅れちゃうよ、それに急がないとバスにも遅れちゃう！」

蒲団を剥がれ、さくらは時計を見ると眉をしかめ言った。

「なのはお姉ちゃん・・・まだ七時半だよ・・・」

すると

「その時計時間が遅れてるよ！ほら今八時五分だよ、早く着替えて
！」

とポケットから携帯を取り出し画面を見せる。

その時、寝ぼけていた顔が凍りつき

「にゃーーーーー！！」

隣の家まで響くような悲鳴を上げた。

所は変わってバス停前、二人の少女が誰かを待っている。

金髪の少女・ありさはイライラしているのだろう周囲にまき散らしている威圧感が半端じゃない、その証拠に彼女の周囲、一メートルにはずずか以外一人もいない、しかし顔は依然として笑顔のまます

ると彼女
は腕を組み言った。

「あの子たちは・・・いったい何回言ったら五分前行動っていう言葉・・・覚えるのかしら」

すると紫髪の少女・すずかは言った

「たぶん、またさくらちゃんが寝坊したんじゃないかな？ふふふ、また寝坊したのかなあ、これじゃあお仕置きが必要かなあ、ふふふ、ふふふふふ」

と黒い笑みを浮かべながら笑い始める

はたして高町姉妹は無事に学校に着くことができるのか、いや彼女がいる時点でそれは無理だろう、しかし周囲の小学生達は思った（高町いい・・・）

第一話 ニチジョウ？

（後書き）

Q、こんな駄文で大丈夫か？

A、大丈夫じゃない問題だ。

ひどい、ひどすぎるご飯の上にピー（自主規制）されたとき以上にひどすぎる

いちばん最初の文章のほうがまだましだと思っけどエラーで消えたとりあえず、最初の作品が上がりました（；|；）。

読んでくれたらうれしいです、感想くれたらもっと嬉しいです。

つぎの話は一週間以内に投稿できたらということ。

次回は？魔法少女リリカルなnさくらさん？第二話 学校をお送りします、うお楽しみに。

作者の反省、なんだよこの短さ・三十センチ定規以上目指せて友達に言われたのにつ、これじゃあ■られる。

今月はそんなに更新できないぜ

三月もそんなに更新できないぜ

第二話 ニチジョウ？ （前書き）

書いてる途中に友達乱入ww

第二話 ニチジョウ？

side 高町姉妹

二人は少しばかり慌てたように走っている、

妹のさくらは余裕があるように見えるが姉のなのは違った彼女は手をひかれながら、息も絶え絶えに走っている。

「お姉ちゃん急いで！遅刻するよ、バスが出ちゃう」

するとなのは半ば諦めたように言った。

「遅刻しかけてるのはさくらのせいなの・・・」

しかしさくらはそんな事は聞こえていないとばかりにさらに加速する。

「急がないと、速く！じゃないとアリサさんかすずかさんにまたお仕置きされちゃうよ！」

すると、なのは今さっきのフラフラとした走りから短距離走の選手もびっくりなスピードで走り出した。

「お仕置きされるのはさくらで十分なの！」

おそらく妹を身代わりにするために先にバス停に着こうとしているのだろう。

「そんなんじゃない、だめだよ・・・お姉ちゃん」

しかし、それは甘かった

「勉強じゃあお姉ちゃんに勝てないけれど！運動じゃ負けないっ！」

さくらは前を走っていた姉を追い越しすぐ近くの角を曲がりバス停に着く！

「ゴール〜いっ！〜！」

するとバス停の近くにいたアリサの手がさくらの頭を鷲掴みにし

「ねえ・・・さくら〜なんで！昨日！言ったのに！また遅刻する

のかなあ！」

万力が如くさくらの頭を締め付ける。

「いひゃい！いひゃいです！アリサちゃん！ごめんなしいい！」

涙目になりながら謝るさくら、

しかし、アリサはさくらの顔をアイアンクローの形に持ち直し、手に込めている力をより一層に強める。

「アリサ？さん？ねえ……さくらあ！私は！前に！アリサ？お姉ちゃん？て呼びなさいって！言ったでしょうが！」

「痛い！割れる！頭があ！出ちゃいけないものが出てくるう！」

傍から見ていたなのはとすずか達は苦笑いしかできない

「ねえすずかちゃん、さくらとアリサちゃん？また？やってるねえ」

となのはがすずかに問いかけると

「うんまたやってるね、多分またこれで遅刻するんだろうね、もうそろそろ止めないと」

と言いますかは朝から元気いっぱい二人の元に近づき

「二人とも・・・いい加減にしないと学校に遅刻するよ」

というが。

「ごめんなさい・ごめんなさい・ごめんなさい・ごめんなさい」

ともはや精神崩壊しているのではないかと思うほど壊・・・動揺しているさくらと

「さくらが！私を！お姉ちゃんって！呼ぶまで！私はアイアンクロ
ーをやめないっ！」

と、どこぞのj.o.j.o.な人の様な事を言ってるアリサの二人は聞く
耳を待たない。

するとすずかはなのはに聞こえないようにさくらとアリサの耳元で

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なにかをささやいた、するとふたりは急に動きを止め、バスに走って乗った。

「ええ！すずかちゃん何言ったの！」

すると、すずかは笑っていない笑顔で言った

「なのはちゃん・・・小学生にはねえ、知らなくていいことが・・・た〜くさんあるんだよ、ふふふ・・・」

するとなのははまるで見えないものに怯えるように何度も頷いた。

その場にいた小学生は言う

「あれは決しての小学生が出せる雰囲気じゃあない」と

第二話 ニチジョウ？ （後書き）

第二話完成・・・ダガしかしテストだから更新できない（大体11日ぐらいまでは）

すいませんでした

第三話 ニチジョウ？

（前書き）

テストと学生生活の終了のお知らせに怯える毎日の作者です・・・
なにあれ・・・テスト怖い。

第三話 ニチジョウ？

sideさくら

やばい、朝のあれで私のHPはもうゼロだよ・・・まだ頭痛いい、頭痛いよう

「うわゝ朝からどうしたの？さくら」

聞きなれた声が聞こえ、そちらに顔をむけると友達の椿ちゃん聞いた、しかし朝の激戦を逃げてきた私には答える気力もなく。

「今日の業務は終了いたしました・・・またのご来店をお待ちしております」

と、どこかで見た看板の内容を思い出し、その文章を読み上げた。

すると椿はまるでアフォの子を見るような眼をしながら私を見ると

「はあ、何時からさくらはお店になった、私にお店になった友達はいない」

と冷たい反応をするので、私は反撃するためにある行動を取ることを考える。

・奇声を上げて窓から飛び降りる。

・いつか携帯用ゲームでコテンパンにする。

・前に貸した小説の結末をばらす。

よし選択できるのは……!!

「しょうもな!!」

あまりにもしょうもない選択肢しかない!

「うわっびっくりしたあ、いきなり起き上がるなバカ!」

驚いた椿は反射的に私の頭に右手をグーにして飛ばしてくる、危なっけどそれは前に見た!

「見切った!」

両手でギリギリ受け止める、毎日、毎日、やられるだけの私じゃない！

「ほんとうに」

攻撃を防いだたというのに椿は笑顔のままで、疑問に思っていると

ガス！！左の方から衝撃が走った

「ふにゃ！」

なぜええ！そう思っていると椿が

「簡単簡単、さくらは両手で？右手？を止めた、しかし私は左手をまだ使っていないかった、即ち？」

朝の攻撃を受けた場所に当たって痛みがぶり返す、涙目になっているのが自分でも分かる、痛いのを我慢しながら

「まだ使っていなかった左手を使った？」

と答えると。

「その通り♪、まだまだ修行も頭も足りないねえ、さくらは」

「失礼な！それにいやだよ！学校に通うだけなのに！攻撃を避ける修行なんてしなきゃいけないの！」

椿は笑いながら言う

「戦わなければ生き残れない」

「なにと！」

「わ・た・し・と」

「なぜに！」

「それは貴女がさくらだからよ♪」

「意味分かんないよ！」

「冗談よ冗談♪」

わらえませんよ椿さん、その黒い笑顔と固く握った拳をどうにかして
てくれないと……

ああチャイム早く鳴れ。

第三話 ニチジョウ？ (後書き)

短いね W W やつとあげたのがこれだよ

第四話 ニチジョウ？ (前書き)

申し訳ない・・・成績なんだがギリギリセーフだったよ2が3個！
更新できなかったのは自分が塵なのと馬鹿だからっだ！

第四話 ニチジョウ？

sideさくら

「・・・くら・・・さく・・・おい・・・さくら・・・」

眠いよ・・・なんか聞こえる、だがしかし睡眠を優先するんだ

「よろしい・・・ならば鉄拳制裁だ！」

恐ろしい言葉が聞こえたあつ！迷わず私は横に飛ぶ

グシャア！！

さっきまで私の頭があつた場所に椿の拳が叩きつけられていた・・・

「私を殺す気か！少しは加減をして！」

少し？身の危険を感じ抗議すると

「警告はしたさ、だからさくらは避けられた、だから反省もしない後悔もしない」

とゆうふざけた様子で笑っている、そこに正座しろこの人格破綻しやあ！と叫びたくなるのを我慢しながら

「なんか用ですか？」

様子がオカシイ？そう思いながら問いかけると

「もっちゃん、さくらが授業を爆睡している間に既に学校は終わつたよ・・・あとな、この前の算数のテストが帰ってきて・・・寝ていたさくらの変わりに受け取ったんだけどお・・・この点数はナ二・・・ネエ・・・コレ・・・ナ二？」

なん・・・だと！・・・しまった・・・まさか地雷を踏んだと！・・・ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！黒くなってる！・・・下手に変なこと言ったら終わる・・・終わってしまふ。

落ち着け、落ち着くんだ私ここは正直にいこう。

「えつと・・・椿に教わった時には覚えていたのに、テストの時になつたら頭が真っ白になつて・・・」

そう正直に

「・・・なつて？」

！！ここだ！畳みかける！

「教えてもらった公式を全部忘れました」

しかしそれは幻だった・・・

「ふふふ、私は優しいから・・・特別にオラオラ！か無駄無駄！かどちらか選ばしてあげよう」

終わってない！でもまだ生きる道はあるはずっ！

「ハイ！椿さま！質問があります」

下手にでて、気をつまくそらせばどうにかなる筈

「ふう・・・どうしたのかな？せつかく何回も何回も教えてあげたのに復習もなにもしなかったさくら君・・・いや愚民」

なぜ復習していないのがわかった！？呼び方がランクダウンした！

「！愚民・・・うう、その選択肢は最終的にどちらも同じ気がします！」

しかし！矛盾点を指摘すれば・・・たぶん椿だつて引き下がってくれる筈だ

「そうかそうかさくらは両方がいいか欲張りだなああ、さくらは」

あつ終わったかな・・・けど！まだ選択肢がある筈！

(。。。)

・逃げる(しかし魔王からは逃げられないww)

・戦う(一・撃・必・殺！・・・回避上げて出直せww)

・キスをする・さくらハヤメテアーアーヾ椿ハグシャ！ベチャ！
ビチャビチャ！ボトボトボト・・・？

神は私を見捨てた・・・しかし！

「逃げる！」

一縷の望みをかけて逃げるを選択

「しかし魔王からは逃げられないいい！」

さあ命をかけた鬼ごっこの始まりだ・・・終了条件は捕まらずに家に着くことD A

「逃げなきゃだめだ！」

運動だけなら勝てる！その角を曲がれば

「みいゝつうゝけえゝたあゝ」

曲がったら悪魔がいた、

無理だったかだけと言わして。

何でそこにいるうううううううううう！

「ヒィアアアアアアアアアアアアアアアア！」

今回の反省点・ちゃんと予習と復習しましょう

第四話 ニチジョウ？ （後書き）

駄文？そんなの分かっている！だから何度も書き直しているんだ

第五話 ニチジョウ？ （前書き）

「作者」おいおいおい・・・次の更新は大体・・・四月の中旬かな？
家のパソコンがポンコツナンデス。

第五話 ニチジョウ？

side さくら

むり・・・あんなのむり・・・あんなの小学生のするもんじゃない、今日はもう動けません・動けませんよ

「明日は平和でありますように、お休みなs」

無理だ・・・限界だ・・・寝よう、既に半分寝ているが意識はあったのだが、なのはが

「おーい、さくらー御飯だよーさくらの好きなハンバーグだよー」

と夕食の時間だと呼びに来た、起きようおなかが減った・・・しかしさくらのHPは0動けない

「さくら？おーいさくら、あれ・・・寝ちゃってるの・・・どうしょ

う．．．．あっ！そうだ」

なのはが下に行き何か持ってきた？なぜだろう．．．ものすごくいやな予感がする、なのはが何か思いついた時は大抵何か恐ろしいことが起きる

「たしか椿ちゃんがさくらを起こす時にはこうしたら？って言うたようなの？」

だめだ神は私を見捨てた．．．椿は追い撃ちをかける気が．．．

「えっと．．からしとわさびとタバスコを混ぜて」

！！やばい早く起きないと変なものが私にいい！！

「．．．お．．．き．．．．．て．．．．．ま．．．．．す」

声が出ない！なんか声がかすれてる！そつだ逃げる時に叫んでたから！

「次はえつとなんだつたつけ？レイジングハート？……あつそつだねハバネロ？だつたつけ」

暴君！いや大丈夫、昨日冷蔵庫を見たときあれはなかつたはず

「椿ちゃんが学校でくれてよかつたの、これをちぎつて入れて、完成！椿ちゃん直伝【形容しがたい何か】」

椿イイイイイイイイ、動け！動け！私のからだ！じゃないと口が私の口が壊滅的なダメージを負う！

「後は飲ませるだけだつたつけ？」

嫌だあんな【形容しがたい何か】なんか食べたくない、おかしいよ！赤色のハバネロ入れたのになんで色が白色って、あれか！全てを浄化するって意味！？ヒツ！いやなんかボコボコ言ってる！

「さくらく起きてる？起きてなかったらこれ飲んでもらうよ」

！よっし！起きてるか確認しにきた、ここで起きてるって言え

「・・・おき・・・てる・・・おき・・・て・・・る」

よかった声の調子も元に戻ってきてるこれで・・・これで生き残れる！

「さくくらく・・・にゃ？？まだ起きてない？？」

「！お・・・き・・・てる・・・おき・・・てます・・・から・・・」

あ！
」

「あっ！さくらやつと起きたの晩御飯だよさくらの好きなハンバー
グだよ
」

気づいてくれた！

「もう・・・さくらはお寝坊さんなの、早く起きての、あっ！
」

「どう・・・したっ！？」

手が滑ったのか？なのはの方を見ると

なのはの手にあった【形容しがたい何か】私の口にDIVEIN

[illegible]

「. . .」

その後の事は何も覚えていない、起きたのは三日後・気づいたら病院にいた、何もなくてすぐに退院できたけど、辛い物はトラウマになった。

「イヤ——！シロイノイヤ——！ボコボコイッテルウ——」

今回の反省点・追撃には気をつけよう

第五話 ニチジョウ？ （後書き）

「????」なに！更新が四月中旬まで出来ないだと！誰か奴（作者）を撃ち■せ！

第六話 ニチジョウ？ （前書き）

長らくお待たせしました・・・申し訳ありませんでした！

日常は後二・三話ぐらいの予定です。

原作どおりに進むの？と思っている方には

少しズレて進むと言っておきましょう。

注意・ユーノは既に高町家に入り込んでますww

第六話 ニチジョウ？

sideさくら

事件です！あのわがママを言わない姉がこの前ペットを飼いたいと言っていたらしいです、

・・・私が寝てる間に決まっただらしいです、

この前から姉がペットにかまっただけで寂しいです・・・。

Fri・16:27・図書室

キンコーンカーンコーン・・・キンコーンカーンコーン

今日はお姉ちゃん達と一緒に帰るはずだったが、用事があるみたいなのでその用事が終わるまで図書室で待っている、椿は薄情にも先に帰ってしまったから一時間くらい・・・一人ぼっちだからさみしい。

まだかなーまだかなーと思っていたら。

「さくらちゃん、帰るよー」

「さくらー帰るわよー」

「ごめんね、さくらー帰るよー」

お姉ちゃん達が丁度よく現れる、読んでいた本を元の場所に戻し、かばんを持って

「うんー！」

返事をし姉に向かって走る。

16:44・帰り道

「そういえば今日お姉ちゃん達はなにしてたの？」

疑問に思い聞いてみる。

「・・・もしかしてなのは、あんたさくらに何にも説明しないで待てせてたの？」

「あれ？言ってなかった？」

なにかあったのだろうか？

「なにが？」

「お父さんが監督してるサッカーのチームあるでしょ」

「それが？」

「もうすぐ試合なんだ」

「へーそーなんだー……ってえっ！お姉ちゃんなんで教えてく

れなかったの！！」

「あれ？えつと・・・言っ
てなかったっけ？」

「言っ
てない！」

「にゃはは、ごめんごめん、次から言っ
たら」

初耳だ、そんなこと一回も聞いてい
なかったお父さんからもお母さん
からも。

「やっぱりみんなして私をはぶっ
てる・・・」

「はあ・・・誰もさくらのことはぶってないから、落ち込まないの」

なごまない！頭なでられてもなごまないぞ！

「なでるな！」

「はいはい・・・あーなごむわーあんた犬みたい」

怒ってもなでるのをやめないアリサお姉ちゃん、だけどそんな犬の撫で方みたいに、撫でてでも気持ちよく。

「はふう・・・」

体は正直だった。

「「「ふふっ・・・・・・・・つく・・・・・・・・ははっ・・・・・・・・」」」

なんだこの空気、なのはお姉ちゃんには啞然としてるし、アリサお姉ちゃんは笑いを堪えてる感じで、すずかお姉ちゃんは目を合わせてくれないし・・・・・・・・！話をそらせばいいんだ

「そっそれでサッカーの試合がどうしたの！」

「うん、それで今度の試合に応援しに行くんだよ」

応援、なんだろう？ちよつといやな予感がする

「・・・・・・・・へ、へーそーなんだー頑張ってね！」

危ない予感がする、話題を変えよう、危険だ・・・・・・・・するとアリサお姉ちゃんが

「なにいつてんのよ、あんたも応援するのよ」

「へっ？」

「だーから！あんたも応援するの！」

「えええ！なんで！それこそ聞いてないよ！いやだよ私」

「ダメよ既に桃子さんはもう応援用の衣装作ってるし、土郎さんもさくらが応援しにくることチームの皆に言ってるし」

私を絶望に叩き込むような言葉を言いアリサお姉ちゃんは

「主犯は家族のなかに！」

そう叫ぶ私の肩に手をのせ

「安心しなさい……もう逃げ道ないから……」

囁いた

次の瞬間、
帰り道の途中で倒れた私は悪くない。

・今日の反省点【家族の行動に注意しよう】

第六話 ニチジョウ？

(後書き)

次もまだ遅いぜ！

第七話 ハジマリ・？（前書き）

やっと始まりですかね？ここが物語の転機だと思う！

第七話 ハジマリ・？

sideアリサ

こんにちは？アリサよ、今・・・逃げ出したさくらを捕まえて、試合の場所まで連れて行っているんだけど。

「ドナ・・・ドナ・・・ドナ・・・ドナ・・・子牛を乗せて・・・」

「

若干・・・壊れちゃった、少し追い込みすぎちゃったかな

「はあ、なによただ応援するだけじゃないの」

「ドナ・・・ドナ・・・ドナ・・・ドナ・・・荷馬車がゆれる・・・」

「

反応・・・・・・・・なし。

「はぁ・・・」

今この手につかんでいる襟を持ち上げ勢いよく振り下ろす！

「グウエ！」

なんか女の子の発しちゃいけないような声が聞こえた気がするけど私は気にしない、さくらの顔を見て話す。

「ねえさくら、今から応援しに行くのよ元気出しなさいよ！」

「・・・・・・・・つに・・・・・・・・は良・・・・・・・・だ・・・・・・・・よ・・」

「ん？」

なんかいつてる？

「別に応援するのは良いって言ってるんだよ！！！」

うぁー！うるさっ！

「耳・・・痛っ！じゃあなんでそんなに嫌がってるのよ？」

「はっ！所詮アリサの眼は節穴か・・・」

「ペナルティ！」

グーで頭を殴る。

「ギャッ！」

いつだって敬語は忘れてはいけない・・・そして

「って……あれ？……あらら気絶しちゃってる」

しょうがない、このまま引きずっていきましょつか。

「はぁ……それにしてもなんで七歳がドナドナ知ってんのよ」

サッカー場までは大体十分くらい、それまでたぶん起きないでしよ
うね。

頭が痛い・・・アリサめ・・・わりと本気で殴ったな・・・タンコブが出来てるって絶対、だって頭の上らへん痛いし、目の前チカチカしてるし、これ無理・・・立てません、立てたとしても応援開始してすぐに倒れる自信があるよ。

「もう歩けるから襟から離してくださいアリサお姉ちゃん」

この痛みを生み出した張本人に開放するように頼んでみる

「ダメよ離れたら逃げるし、それにフラフラしてるし、それに今日なんか・・・嫌な感じがするのよ」

このタンコブを生み出した張本人が何を言いやがるか、ハツ小学校でばけたかアリサ。

「あんたまたなんか失礼なこと考えてるでしょ」

読まれた！？なら今することは一つ、頭に手をやって

「ごめんなさい」

謝ることだ。

「まあ・・・いいけど、もう少しで着くからその顔なんとかしなさい」

？顔・・・顔がどうしたの？

「まさか、気づいてなかったの？涙でグシャグシャよ」

そこまで必死に逃げていたのか私は・・・。

「ニヤアッ！」

さすがに恥ずかしい！

「はあ・・・ほらハンカチ持ってる？」

顔を手で隠し言い返す

「持っていない・・・」

家から全力で走って逃げてきたのだ、持っているはずがない。

「はぁ・・・そうだと思った、あんたも女の子なんだからハンカチぐらいもつときなさいよ」

理不尽だ・・・誰のせいで朝から泣くまで逃げ回っていたと思う。

「ほら、これ使いなさい」

手が差し出されたのでそちらを見ると、アリサお姉ちゃんが手にハンカチを持っていた。

「うう・・・ありがとう」

なぜだろう何時、女王様なアリサお姉ちゃんが優しい・・・まさか偽者！

「あんたまた失礼なこと考えたでしょう」

違った本物だったみたいだ、私の考えをタイムラグ無しで読めるの

はアリサお姉ちゃんかすずかさんだけだ。

「ほーら急いで顔直さないと、なのはやすずかそれに土郎さんにサッカーチームのメンバーのみんなにその顔見られちゃっわよ」

なっ！急がないとやっぱりアリサは悪魔だ！！

「あら、なのは発見！それに桃子さんとすずかも」

やばい！ち、ちよつと

「少し！あとちよつとだけだから！あとちよつとだけ！」

「そう・・・でもね」

！今のうちに早く！っでもね！

「時間切れよ」

なんとか前を見るとそこには笑顔で衣装を持ったお母さんがいた

今日の反省点・最後まで逃げ切ろう

第七話 ハジマリ・？（後書き）

すいませんでした、急ぎで上げたから編集しなおしました。

第八話 ハジマリ・？ （前書き）

前回の引き続き？・・・ではなくて試合が終わってちょっと後の所から始まります。

第八話 ハジマリ・？

sideさくら

最後に目に映ったのは樹、とても巨大な樹

今さっきまでは生えていなかった、とてもじゃないが一日そこらでは絶対に生えそうにない巨大な樹、

それは私たちの知る間も無くやってきたのだらう、アリサと一緒に入った店は古いこともあって、その影響でできたのか地震で簡単に崩れた、

上から瓦礫がアリサに落ちてきているのを見て、とっさに突き飛ばしたらアリサの代わりに私が瓦礫の下敷きになった

その衝撃で少しの間私は気を失っていた、

目を覚まし崩れた足ががれきで固定されているのがわかり何とかして建物の窓から覗いて見えたのは木の根っこ、街中じゃ普通はみない木の根っこそれも見たことのないぐらい巨大な。

建物の軋む音が聞こえるのにアリサは私から離れようとしないう、ピシッという音が聞こえた、崩れるのだろうか、だからこんな古い店は止めようと言ったのに。

足が動かない・・・体が鉛のように重い。

「ね・・・！さ・・・らっ！・・・しっ・・・し・・・さい！さ・・・ら・・・さ・・・らっ！・・・」

熱い・寒い・痛い・寒い・気持ち悪い・痛い・気持ち悪い・寒い・痛い・熱い・痛い。

「．．．っか．．．し．．．いつ！．．．．．．．．．しっ．．．り．．．
して！．．．くら！」

．．．．．．．アリサがよんでいる．．．．．

けど何を言っているのかわからない。

膝から下が見えない、落ちてきた瓦礫に挟まれたから。

足の感覚もない骨でも折れているのか、はたまた血管が破けたか、
血が流れたせいでお母さんが作った服も血まみれ．．．それ以前に
ボロボロ。

「．．．だ．．．か！．．．た．．．け．．．て！．．．．．．．．．
れ．．．か！．．．」

．．．．．アリサが泣いている．．．．．

「だ．．．か！．．．た．．．け．．．！．．．お．．．ね．．．が．．．
！．．．れ．．．か！．．．」

．．．．．もうすぐ此処も崩れる．．．このままでじゃあアリサが
巻き込まれる．．．．．。

別に死ぬことなんてどうでもいい、せめてアリサは巻き込みたくない。

「．．．さ．．．く．．．らっ！．．．．．さ．．．く．．．！．．．．．」

．．．．．どう．．．．．すればいい．．．．．どうすれば．．．．．アリサは巻き込まれない．．．

誰かアリサを．．．お姉ちゃんを助けて．．．助けてくれるならなんだってする、悪魔にだって魂を売ってやる、地獄にだって行ってもいい．．．

「に．．．げ．て」

なんとか声が出て逃げるように言つと。

「ふざけんじやないわよ！アンタ置いて逃げれるわけない」

ここまできてやっと聞こえた、しかしアリサの怒鳴っている途中、いきなりアリサの下に三角と丸でできた魔方陣？のようなものが浮かび

目の前からアリサが一瞬で消えた。

いきなり消えてしまって、どこに行ってしまったかはわからない、普通なら慌てることなのだろうがなぜかアリサは死ぬことはない、そう思った、するとも以上に頭を動かしていた反動なのか意識が段々薄れてゆく。

・・・目の前が暗い・・・

窓の外から強い光が一瞬入り、建物が一際強く揺れそして建物が崩れる。

そして私の上に瓦礫が落ちてきた

落ちてくるのがなぜか遅く感じる瓦礫を見ながら

無理だとわかっているのに、

最後に一度だけみんなに会いたい、そう願った時。

「助けてあげるよ」

声が聞こえた

そこで私の意識は途切れた。

第八話 ハジマリ・？（後書き）

ちよつと長くなった・・・やっぱ、さくらsideだけにします
かな・・・とりあえず現在執筆中です

ちなみに今テスト週間中です。

第九話 オハナシ・？（前書き）

続きだっ

・・・・・やめて！石投げないで！テンプレとか安い安いww
とか言わないで！。

第九話 オハナシ・？

side さくら

目が覚めたらそこは見渡す限り白一面の世界でした。

どこまでいっても白、白・白・白・白・白・白・白色だけ

どっちが上でどっちが下かもわからない、

見えるものは何もなく、まるでどこまでも続いているように思える

一瞬ここって天国と思った私は悪くない。

「おーい、だーれーかーいーいーまーせーんーかー？」

誰もいないと寂しくなる、

「だーれーかーいーいーまーせーんーかーいー！」

しかし返事はない、ならもう一度！

「だーーーーれーーーーか「呼んだ？」あああああ！！」

後ろから声が！ッ後ろにいない！！じゃあどこにと思いながら前を向くと

「こんにちわー」

目と鼻の先にいた

「にゃあああああああああああああああ！！」

「ハローッ！グフオ！！」

叫んだ私は悪くない！反射的に殴ってしまったけど私は悪くないっ
たら悪くない！無理無理絶対無理だっていきなり目の前に映画で魔法
使いが着るようなローブ着た人がいるんだよ！

はっ！そうか！

「あなたはもしかして最近学校で噂になってる小学生の女の子を襲う変質者！！」

ピンチ！天国かと思ったら不審者？に拉致されただけだった！

「あれ・・・こんなだったか？・・・はぁ・・・オーケー、オーケーわかる、君がそう言いたくなるのも、君が不審がるのもよくわかる、だけど私だって好き好んでこんなもん着ているわけじゃない、それに私は不審者じゃないだから少し落ち着いてくれ」

気を許してはだめだ！あれはきっと先生が言ってた不審者の行動！安全なふりをして油断させてそしていきなり襲うって、なら！

「嘘だ！！」

ただ叫ぶしかない。

すると不審者（暫定）も

「嘘じゃない!!」

叫び返してくるだど・・・!!

「もしかしてあなた電波受信してるんですか!!」

お母さんが言ってた場合によつては不審者より危険な電波を受信しちゃって逝っている人だったのか、
しかし怯んだらこっちの負けだ、こっちも叫び返すのみ!

「しとらんわ!!」

関西弁で叫び返してきただど!ならこんどは今さっきの!

「嘘だ」ああ!もう面倒くさい」!!」

すると不審者(電波受信中)は苛立ったように大声をあげて、身に纏っているローブをどこかに脱ぎ去った!

!?しまったこの不審者(電波受信中)は露出魔だったのか!

と思っていたのは束の間、なんとあの機能性のかけらもないロープの中から出てきたのは白色？どっちかと言うと銀色に近い長髪を後ろに流した赤目のきれいなお姉さんだった、

それも映画の中なかで出てくるような美人なお姉さん、

そう自分の周りにも忍さんとかお母さんとか美由紀お姉ちゃん？とかそれこそ雑誌に載っててもおかしくないくらいきれいな人はたくさんいる、しかしこのお姉さんはただ綺麗だけじゃなく、なにかわからない？言葉で表わしたら？？？しかしイメージは大和撫子だった・・・

「私は不審者なんて失礼な名前じゃない！事情があってファミリネームは言えないが、私の名前はアイリス！不審者じゃなくてアイ・リ・ス・だ！！」

ヒイ！！なんで、お母さんもそうだが綺麗な人ほど怒ったときってこんなに怖いんだろう。

「じっ、ごめんなさい！！」

「はぁ・・・いや・・・いい、君はこんな子だってわかってたのにこんな恰好をしてた私が悪いんだろうからな」

あれ意外とすんなり許してくれた？・・・もしかして優しい人・・・

「これから話す内容を考えて少し鬱になってた気が晴れたしな」

ではなかった、なんかあの人黒い？・・・もしかしてあぶないのか？・・・すずかさんの感じで、もしそうなら！とっ、とりあえず！

「えっと、すみません出口はどこでしょうか」

逃げよう。

「ああ出口なら・・・・・・ないよな？」

「えっ・・・わからないんですか・・・」

「正確には言えないけど無いと思うよ、それにあったとしてもあなたは帰れない」

「へっ？」

アイリスさんの言葉に疑問を感じながら出口らしきものを、自分で探し始めたが周りには何も見当たらない、諦めて、前に向き直るとアイリスさんは真剣な表情で、

「だってあなた・・・死んじゃってるもの」

ある意味一番いやな答えが返ってきた

第九話 オハナシ・？（後書き）

い
）
・・・感想がほしいです、指摘されたいです（断じてMじゃあな

感想について

こんにちはMでSでTな人です、

いきなりですが今回のこの話は本編と全く関係ありません。

さてさて今回の本題はタイトルに載ってる通り感想についてです、

はい簡単に言うと、今回初めて感想をもらいました！ありがとうございます、
ざいます、かなり嬉しいです

そして感想をもらった時に気付いたことがあります

？あれ？これどうやって感想返信すんだ？？

やばい・・・感想くださいと言ったのに返信できない・・・

はっ！作品のあとがきに感想と質問の返信をしていた作品があったはず！

ということで未熟者ながら先達のマネをさせていただきます

すみませんでした・・・今回のこの回も昨日の七時あたりに載せようとしていたんですが・・・パソコンがポソコソなのか自分がポソコソなのかわかりませんがエラーが連続して出てきてしまい、こんな時間に返事が遅れてしまいました、現在は学校のPCからあげています。

最後に質問の返答です。

Q、ケロちゃんとかユーノとかのようなマスコットキャラは出てくるの？

A、マスコットキャラは出てきませんがツバキやらアイリスに次ぐオリジナルキャラが出てきます。

最後に感想を下さった方々に

ありがとうございます！

感想について（後書き）

なんかよく見たら最初にお詫びが載っていたので削除いたしました、できればこちらをお読みいただけたらと思います。

第十話 オハナシ・？

side さくら

アイリスさんが真剣な表情で言ったのは、簡単な文章

「あなた・・・死んじゃってるもの」

しかしそれは・・・なんというか今さらだった

「そんなことわかってます、逆に瓦礫に押し潰されない小学生っていますか？」

と笑顔を作って言いかえすとアイリスさんは？ポカン？とあっけにとられた表情で言った

「ほー近頃の小学生ってこんなにも冷静なのかな？かな？」

なぜに姉の口マネ、しかしなぜだろう？一瞬頭に二十歳ぐらいの大人になったお姉ちゃんが思い浮かんだ、しかし目のハイライトが消えていて雰囲気はどこか暗くてまるでどこぞの魔王様もかくやな雰囲気・・・

しかし・・・格好は真っ白な服の魔法使いのコスプレ・・・年齢的にきつい、激しく鬱だ、もしお姉ちゃんが魔法使いならお姉ちゃんのことだ大人になってても魔法？少女？って名乗るんだろう、いや名乗るな、はぁ・・・年考えr・・・おっと危ない。

まあ今はどうでもいい、聞きたいことはこれじゃない。

「聞きたいことがあるんですけど、もしかして私を助けたのっ」

「私よ」

アイリスさん……人の話は最後まで聞こうよ……

「……もしそうなら、なんで私を助けたんですか？」

助けたのはアイリスさんだった、しかし私なんかを助けてもメリットがない。

「ええ、メリットは有るけど、デメリットは無いからね」

この人ナチュラルにこっちの思考読んでる。

「メリット？……私を助けて何のメリットがあるんですか？」

「さあ？なんだろう？」

やっぱり教えてくれないか。

「別に教えてもいい理由ならあるわよ、一つ目の理由はただ単に私の娘くらいの子供が死ぬ所を見たくなかったから」

若く見えるのに以外に子持ち、もしかして既婚者？それに一つ言うことはまだ理由がある？

「まあ来るのが遅くて死んじゃったけど、ああそれに二つ目の理由もあるけど・・・聞きたい？」

なんかこの人面倒臭い、

「それでなんなんですか？」

「二つ目の理由はね……」

溜めるなーこいつ

「私と契約して魔法少女になってよ」

「おまわりさー……………ン……！」

ガチだこの人！！マジモンの電波さんだ！！

「ちなみに拒否権はない……（ドヤッ）」

なにこの電波野郎むかつく……

「まあそれはおいといて・・・本題に入ると君には本の精霊的な人物を救いに行ってもらう、ちなみに一応報酬もつけよう前払いで」

割と重要なことだったのに・・・

「救われない運命の本を救う？意味分かんないよ・・・それに報酬？死んだのにそんなの貰っても意味ないんじゃない？」

「まあまあ、さくら話は最後までよく聞くもんだ、君は死んだ、だから当然私が君に払うとするなら第二の人生だ」

「第二の・・・人生？・・・まさか生き返れるって言うの？」

本当なら願ったこともない、またお姉ちゃんに皆にあえる。

「もちろん、私は出来る事しか言わない、しk」

「なら今すぐ・・・早く!!」

「落ち着きなさい、ちょっと長いけど話は最後まで聞いてね、今の君が外に出たとしたら君は出た瞬間死んでしまう、なぜなら体に重

大なダメージを負ってるから、リンカーコアにはヒビとか欠けてい部分が有って結構な損傷を受けている、魂はわかんないけどまあここに居て普通に会話できるということから多分損傷は少ないけど、君の状態を私から言わせてもらうと、あなたの体は既に再起不能なまでに壊れて死んでいる・・・そこんどこわかってる？」

体はボロボロで死んでいる、意味のわからないコアもボロボロ、いたいどうすればいいんだろう・・・

「・・・じゃあ一体・・・どうやって私を生き返らせるんですか？」

一瞬で地獄に叩き落とされた気分だ、体が死んでいるならどうやって生き返ればいいのか

「簡単なことさ、壊れていて足りない部分があるなら、足りない部分を持ってきたらいいんだ」

「持つてくる・・・どういう意味？」

「簡単な問題だ君の体は既に死んでいる、分かってるよね？」

それは今さっきの話題にも上がった、でも体が死んでいるならどうやって生き返らせるのか？

「そう君の体は死んでいる、なら別の器を創ればいい新しく作った器には私と君の体を材料に作るとするからから多少の無理は大丈夫・
・それに私も一緒に入るんだが・・・・まあ多分拒絶反応とかは出ないだろうし・・・・はい一気に問題は解決！」

「おい最後になにボソツと言った！！それにお前ついてくる気か！！」

「大丈夫、大丈夫 たっ、たぶん成功するよ、えっとあれだ何だっ
たっけそう そうだ！」

なんだ今さっきまで自信満々だったのに急に……

「大丈夫だ、問題ない」

「自然に死亡フラグ建てた！！」

「うるさい！黙れ！お前がここから出たいのと同じでな、私だって
ここから出て早く！夫に！子供達に！逢いたいんだ！！」

いきなり怒られてもちよつと返答に困る、

「うっ……えっと、あの、その……」

「さあ！お前に残った選択肢は三つだけだ！！」

アイリスさんが叫んだと同時に目の前に半透明のパネル？ウィンドウが浮き上がってきた

・『アイリスさんに協力してここから脱出する』（なんか副作用があるかも？）

・『自分ひとりで脱出方法を探す』（見つかる確立はかなり、かなり、かなり低い）

・『このままこの状態』（多分少ししたら自我が消滅する）

・・・・なんだこの選択肢カツコの中に悪意を感じるの
は私だけか・・・確実に選ぶ物が決まってる

「さあ！早く選択しなさい、今すぐ！早く！ハリー！ハリー！」

イラつくコイツ

「うるさい黙れ！！それよりな！！お前最初から選択肢選ばせる気ないでしょ！！」

「ふっ」

「ふざけんな！お前ふざけた答えばかりしてるとs」

「残念だが答えは聞いてない！なぜなら君は最初に同意した『なら今すぐ・・・早く！！』とな！！」

「あ、あれはちちちょっとした気の迷いで本心では・・・」

しかし勢いのついた人間は止まらない

「答えは聞いていないと言っただろう、じゃあ行こうか大丈夫痛いのは最初の少しだけだ」

なんか言い方が卑猥だ！

「ちょ！まつ！」

心の準備ができてない！話し聞け！

『・・・・・・・・・・・・・・・・！・・・・・・・・・・・・・・・・！』

アイリスさんが聞いたことあるような、聞いたことのない言語を詠唱し始めたと同時に、空間が次第に発光しはじめ大量の魔法陣が浮かび始め。

『・・・・・・・・・・・・・・・・！』

空間の中が大量の魔法陣で埋め尽くされ、一際激しく光った瞬間

死んでしまった

あの時と同じように

とは行かなく頭を殴られたようなアイアンクローをされてるような、
つまるところいつもみたいに意識が途切れた。

第十話 オハナシ・？ （後書き）

うつえい、さくらのメツキがはがれ・・・ゲフンゲフン

皆さん次回もお楽しみに（爆）

見てくださいね。

主人公設定・ステータス（前書き）

あとがきに略した単語まとめがありますよ

主人公設定・ステータス

魔法少女リリカルなのは（無印時）

高町さくら（7歳）

ステータス

NEW魔力A・

NEW筋力C・

NEW知力B・

NEW敏捷B・

NEW幸運D・

NEW耐久C（物理攻撃に対する防御力・この場合、自転車に当たっても痛い程度）・

対魔力B（魔力攻撃に対する防御力・この場合、BJが無い状態でDSが直撃しても辛うじて気絶しない程度）

スキル

ミッド式魔法・初級（頑張ってサーチャーっぽいものが出せる程度、要練習）

ベルカ式魔法・初級（少し力が強くなる程度、要練習）

収束・初級（周りの魔力を引き寄せる、まだ打ち出すことはできない、練習によりランクアップする）

魔力変換資質・炎、雷（マッチ程度の火、静電気しか起こせない、練習によりランクアップする）

料理・中級（両親には及ばないものの一人暮らしの社会人レベル、練習によりまだランクアップする）

主人公設定

NEW身長・小学生一年女子の平均値・・・（ヴィータより少し高いくらい↓ヴィータと同じくらい）。

NEW髪の色・紫色↓灰色、NEW目の色・青↓紫、顔立ち・整っている。

外見・若干つり目なようj・・・女の子。

イメージ？な人は、つり目で髪の毛が肩まである黒髪の女の子を思い浮かべてください。

魔力光・灰色

性格、のんびり・たまに冷静、暴走

甘党・なつくと犬・人見知り・何かと勘違いしやすい・犬好き（毛
がモフモフした犬種）・白衣が苦手。

主人公設定・ステータス（後書き）

D S Ⅱ デイバインシューター ≠ 任○堂ハード

B J Ⅱ バリアジャケット ≠ 無免許医者

第十一話 アネ？（前書き）

・・・いやはや、学校の講習が金曜まであった（七月二十五日現在）

時間が少しあったので少しだけでも書いておこうと思い投稿です。

第十一話 アネ？

sideさくら

目が覚めるとそこは・・・知らない家に、ソファの上に寝かされ頭には包帯がグルグル巻き、よく見たら左足はギプスみたいなので固定されていた。

治療されてる？・・・それはありがたいだが、あえて言おう

「ここはどこ？」

しかしなぜだろうか見たことも来たことも無いはずの部屋なのに懐かしい？半分以上寝ぼけている頭でそんなことを考えていたら

「あら、起きたんか？」

いつの間にかソファの隣に車イスに座っている茶色っぽい髪の毛の少女が。

「だれ……ですか？」

会ったことは無いはず、なのになぜか既視感を感じる。

「だれっていわれたらこの家の家主で八神はやてっていうんやけど、じゃああなたの名前は？なんで公園の真ん中で倒れとったん？それなんでそんな大怪我しとるん？」

せわしない、まるでマシンガンの様だ・・・しかし疑問に答えてもらったし、自己紹介は大事・・・まずは名前から・・・？

「私の名前は・・・あれ？私はさくら・・・だよ？あら・・・えっとその私の名字なんでしたっけ？」

あれ、名字だけすつきり抜け落ちてる・・・思い出せるのは・・・ほんの少しの思い出しかもそれもすごくあやふやで殆ど思い出せない。

「いやいやそんな私に聞かれても困るんやけど、もしかして自分のことなんも思い出せへんの？」

心配そうな顔をされた、なぜだろうものすごく泣きたい

「すみません・・・なぜかなにもかも思い出せません・・・」

謝ると同時に体が勝手に土下座の態勢に・・・なぜ？

「えっと・・・そのさくらちゃん急に土下座されてもちょっと困るんやけど」

「すみません・・・思い出せません家の場所も帰り方も自分の名字も」

体の次は口が勝手に動く・・・

「わかった、わかったからちよつと待ってな、整理するとさくらちゃんは今自分のことが何もわからない、自分の名前、家の場所それに帰り方」

「あの・・・えっと・・・そのお・・・はい、そのとおりです」

これだけは自信を持って言える、今の私は家の場所はおるか自分の名前もろくに言えない

「それは困ったな、そんならさくらちゃんこれからどうするんや？」

「どうするとは？」

何が？どうするんだろっ

「さくらちゃん自分の名前も家の場所分からのやる？」

思い出そうとしても記憶に霧がかかったように思い出せない

「はい・・・」

「それなら今のさくらちゃんには二つの選択肢があんねん、一つ目はこれから警察に行つて両親を探してもらいにいくか、二つ目は自分のこと思い出すまで私の家にいるか・・・まあ簡単にいえば家族になるかやね」

二つ目はありえないかな・・・たぶん・・・たぶん。

「一つ目は両親も見つかるかもしれんけど多分いろんな事を聞かれるでさくらちゃんみたいな子供がそんな骨が折れとつたり色んなところにヒビが入るような大ケガしとるからな」

確かに体中が痛いのは骨折やらヒビのせいかもしれない、しかしなんでこんな大ケガ原因がわからない、体中が痛む原因となつた原因が事故なのか・・・それとも“虐待”なのか・・・それはないと思いたい

「二つ目はこれといって利点はないな、ただケガが治って全部思い出すまで一緒に暮してもらっただけ……やな」

今の何もわからず、だれが敵かもわからない私にとっては最高の申し出だし、しかし疑問に思うことがある

「その……すみません……聞きたいことがあるんですが」

そう話している今、この時に普通居なければならない人物がいない

「あの……」「ご両親は」

「死んでもうてんちょっと前に、ちょっとたっていつでももう何年も経ってんねんやけどな」

「あの、その……すみません」

「ああ別にええよ、悲しかったけどもう昔のことや……それでど

うつする？今からはちょっと無理やけど動けるようになったらすぐに警察に行くか、一人ぼっちで寂しいと死んでまう兎な私と一緒に暮らすか」

そのききかたはズルイと思う・・・どうせ動けないし病院や警察に行ったとしても行ったとすぐに思い出せるとは思えない、それなら答えは一つしかない・・・

「あの・・・はい・・・その不束者ですがお願いします・・・」

「ふふつ、なんやまるで嫁入りにきたみたいに」

顔が段々真っ赤になっていくのがわかるちょっとふらふらしてきてるし。

「よかったしく おねがいします!」

そう・・・ここから病人と記憶喪失者の奇妙な家族生活が始まった

第十一話 アネ？（後書き）

修正修正・・・もう一つおまけに修正、文字数が上がった

時間があつて頭がすっきりしてると速度が違ふねやっぱり、昨日上げたのを見た友人が見てこれ何？何が言いたいの？と言われたので学校で急いで修正

、まあ駄作には変わりないが若干改善されたと思いたい・・・。

今週の金曜で学校の講習が終わりなので・・・更新速度が遅くなりますね（確定）自分は学校からあげてるので、家のはポンコツ過ぎてダメなのです・・・ハア・・・自分専用がほしい、ではこれでおいとまするとします。

第十二話 ナンダロナー（前書き）

未完成

第十二話 ナンダロナー

[illegible]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0684r/>

魔法少女リリカルくら

2011年12月26日21時14分発行